

## 契丹小字文献における母音の長さの書き分け

大竹昌巳

京都大学大学院生／日本学術振興会特別研究員

**【要旨】** 契丹語はモンゴル諸語と親縁関係を有する死滅した言語で、11-12世紀の契丹小字文献によってその姿を知ることができる。本稿は、契丹小字文献における母音の長さの書き分けについて、同源語の比較やテキストにおける分布特徴の分析、接尾辞の異形態や綴字交替の分析等を通じて以下の点を示す。(1) V, CV のように開音節型の字素の母音は長母音を表記している。(2) VC のように閉音節型の字素の母音は基本的に短母音を表すが、長母音 *ē* + 子音を表す一連の字素も存在する (V は母音, C は半母音を含む子音を表す)。また、比較言語学的観点からは、(3) 契丹語の長母音には現代モンゴル語の (母音間の子音の脱落による母音縮合の結果生じた) 二次的長母音に対応するものに加えて、(4) モンゴル祖語やテュルク祖語にかつて存在した一次的長母音と対応すると考えられるものが存在する可能性についても論じる\*。

**キーワード**：契丹語、契丹小字、長母音表記、二次的長母音、一次的長母音

### 1. はじめに

本稿は、モンゴル諸語と親縁関係を有する契丹語を表記した 11-12 世紀の契丹小字文献において、母音の長短の対立がどのように書き分けられているかを明らかにする。そのために、特に長母音がどのように表記されるかに着目し、同源語の比較やテキストでの表記特徴の分析によって長母音の表記方法を論証する。

#### 1.1. 契丹語と契丹小字

契丹小字文献は 1922 年に遼 (契丹国) (916-1125) の皇帝陵で皇帝・皇后の哀冊 (墓誌銘) が発見されたのを契機に世に知られ、現在まで主として中国遼寧省および内蒙古自治区東部で出土が続いている文字資料である。主たる資料は墓誌銘であり、

\* 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「契丹語・契丹文字の歴史言語学的・文字類型論的研究」 (課題番号 26・3830) の助成を受けたものである。本稿の執筆に際し、お二方の査読者に貴重なコメントを頂戴した。ここに記して感謝申し上げる。

契丹小字の字素の推定音価や綴字法については現段階で研究者間に一致した見解があるわけではない。本稿では大竹 (2014) に若干の改訂を施した翻字・転写表記を用いる。本稿の論点である母音の長さについても結論を先取りする形で提示してある。契丹語の翻字・転写表記に用いる推定音価について注意を要するものは以下の通り：*ä* [e], *c* [ʈ], *č* [ʧ], *e* [ə], *ē* [e], *j* [dʒ], [ʧ ~ ʧʰ], *n* [n], *o* [ɔ], *o* [ø], *ɔ* [ʃ], *ü* [o ~ u], *ü* [y], *z* [dʒ], *z* [ʒ]。<*a-b-c*> は翻字表記 (- は字素境界)、/abc/ は転写表記を表す。/abc/ は音素表記。

言語名の略号は以下の通り：Dag. ダグール語, Kalm. カルムイク語, Khit. 契丹語, Manj. 滿洲文語, MM 中期モンゴル語, Mong. モンゴル語, Sakh. サハ語, Trkm. トルクメン語, WM モンゴル文語。

現在までに40点ほどが確認されている<sup>1</sup>。

遼の正史である『遼史』(1344年成書)によると、契丹小字は太祖耶律阿保機(872-926)の弟耶律迭剌が回鶻(ウイグル)の言語と文字を習得し、それによって創製したとされる<sup>2</sup>。契丹小字は契丹語を表記する手段として続く金朝(1115-1234)でも使用されたが、明昌2年(1191)に契丹文字を廃止する詔が發布され、死文字となった。契丹語も契丹人の周辺民族への同化とともに元代(1271-1368)を下限に死語となったとみられる。

契丹小字には400種類程度の字素(grapheme)があり、それらを原則として左上、右上、左下、右下、また左下、右下…の順に排列して1つの字(graph)を形成する<sup>3</sup>(図1)。1字は1語に相当する。字素や字の外形は漢字を模倣したものであり、書字方向も漢字と同様、縦書きで横行は右から左へ進む<sup>4</sup>。

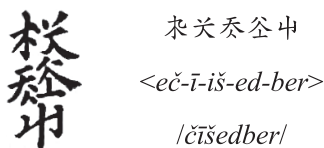


図1 「孝行な (masc.)」を表す字の構成

契丹語は契丹文字発見以前から、漢文資料に断片的に残された音写語を通してモンゴル諸語と親縁関係を有することが論じられてきたが<sup>5</sup>、契丹文字の研究の深化に伴ってその仮説の妥当性は裏づけられてきている。

## 1.2. 契丹小字の音価推定方法

契丹小字の解読は、1970年代に漢語語彙の同定を契機に大きな進展があり(契丹文字研究小組1977, 1978, 1985)、特に90年代以降文献量が飛躍的に増加したことによって漢字文献中の音写語やモンゴル諸語との同源語との同定が進み、それに

<sup>1</sup> 呉英喆(2012: 3-8)によると、現在までに発見された石刻資料は41点あり、最古のものは遼代の重熙22年(1053)、最も新しいものは金代の大定15年(1175)の銘をもつ。このほか、仏塔・陵墓の壁面や陶磁器等に墨書されたもの、銅鏡・銭貨・符牌等に鑄刻あるいは線刻されたものもあるが、総じて量は多くない。

<sup>2</sup> 白鳥([1898]1970: 47f)は『遼史』の記事から契丹小字創製の時期を天贊3年(924)または翌4年と推定している。

<sup>3</sup> ただし字が奇数個の字素からなる場合、字末の字素は左寄りではなく中央に寄せられる。

<sup>4</sup> なお、契丹小字の字は、その排列法のために、横幅はほぼ不変であるが縦幅は構成する字素の数によって可変的であるという性格をもち、この点、常に概ね正方形となる漢字とは異なる。このことから分かるように、契丹小字は縦書きに特化した文字であって、横書きには向かない。本稿では、契丹小字の字形を示す場合には元来の排列法には拘らずに字素を横一列に並べることとする(図1右上列参照)。

<sup>5</sup> 夙に白鳥([1910-13]1970: 303-320)は契丹語の数詞がモンゴル語と対応することから契丹を「蒙古を骨子と」するものとみている。

よって音価の推定も行われてきた。ただ、従来の研究では系統立った検討がほとんど加えられず、あまりにも恣意的に音価が決定されてきたきらいがある。

表1 漢字音写や同源語との対応に基づく先行研究の音価推定<sup>6</sup>

漢字音写	元代音	小字表記	先行研究	gloss
沙里	<i>ša.li</i>	𠬞𠬞𠬞	<i>ś-a-ri</i>	郎君 (男性称号)
撻丕也	<i>ta.bu.ĭä</i>	𠬞𠬞𠬞𠬞	<i>t(e)-bu-ei-er</i>	(人名)
捏褐	<i>nĭä.xe</i>	𠬞𠬞	<i>n(i)-qo</i>	犬
涅魯古	<i>nĭä.lu.gu</i>	𠬞𠬞𠬞	<i>n-ar-qó</i>	(人名)
MM / WM	Mong.	小字表記	先行研究	gloss
<i>sōni</i>	son ~ jon	𠬞𠬞	<i>s-uni</i>	夜
<i>mori</i>	mcer	𠬞𠬞	<i>m-ri</i>	馬

特に本稿の議論に関係するところでいえば、母音（があること）をどのようにして決定するかという方法論上の問題がある。例えば、先行諸研究では表1のような漢字音写との対応に依拠して字素 𠬞 に *li, ri, ali*、字素 𠬞 に *bu, abu*、字素 𠬞 に *qo, ga*、字素 𠬞 に *gu, go, qo* といった音価を推定しているが、漢語の音節末に立ちうる子音音素に限られることを考慮すれば、果たして「里」(\**li*)、「不」(\**bu*)、「褐」(\**xe*)、「古」(\**gu*) のような概して聞こえ度の大きくない母音に契丹語の母音を表記する意図があったかは疑わしい。これらの漢字が契丹語の音節末子音を音写するために用いられた可能性を排除できない。また、先行研究では同源語の中期モンゴル語形やモンゴル文語形との比較から字素 𠬞 に *ni, uni*、字素 𠬞 に *ri* といった音価を推定しているが、非初頭音節の母音の弱化・脱落が進行した現代モンゴル語の語形では語末に母音がない。契丹語は中期モンゴル語に時期的に先行するとはいえ両者に直線的な系譜関係は想定されないため、時期的な先後関係は契丹語で母音脱落が生じていなかったことを保証するものではない。母音脱落等による音節の改変が生じている可能性がある以上、同源語の古い形式に拠って上記の字素が母音終わりであることを決定することはできない。要するに、音写語や同源語といった契丹語外部のデータとの個別的な比較のみによって母音の有無を決定することは原理上不可能であるにもかかわらず、従来の研究はそのような方法に大きく依存して音価の推定を試みてきたのである。

そのような音価推定の恣意性を排除するためにはテキスト内部のデータの体系的分析が不可欠であるとして、大竹 (2014) は字素の字 (graph) 内での分布特徴を

<sup>6</sup>ここでは先行研究の推定音価を Kane (2009) のもので代表させる。他の先行研究も問題となる部分に関しては大同小異である。なお、母音に附されているアクセント記号は同音を識別するためのもの。漢字音については、参考として『中原音韻』(1324年刊)に基づく元代北方音を、大竹 (2014) の表記法に拠って示す(以下、本稿で示す漢字音はいずれも元代北方音)。遼代北方音と元代北方音との差異については未だ明らかでない部分もあるが、沈鍾偉 (2006) 等を参照。

統計的に調査する手法を採り、以下のような原則を見出している<sup>7</sup>。

- (1) a. 母音終わりの音価をもつと考えられる字素  $\langle V_a \rangle$ ,  $\langle CV_a \rangle$  の直後には特定の字素  $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \dots$  のみが立ちうる。これらの字素  $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \dots$  は他の母音終わりの字素  $\langle (C)V_\beta \rangle$ ,  $\langle (C)V_\gamma \rangle$ ,  $\langle (C)V_\delta \rangle$ , ... の直後には立たない<sup>8</sup>。
- b. 字素  $\langle V_a \rangle$  の直前ではこのような特定の字素のみが立つという分布特徴は見出されない。
- c. 字素  $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \dots$  の直後ではこのような特定の字素のみが立つという分布特徴は見出されない。

大竹 (2014) は、上記のデータから次の帰結を導いた。

- (2) a. 字素  $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \dots$  は字素  $\langle (C)V_a \rangle$  の母音  $V_a$  と同じ母音から始まる音価をもつ。
- b. 母音終わりの字素  $\langle (C)V_a \rangle$  の直後には同じ母音から始まる音価をもつ字素 (すなわち  $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \dots$ ) を綴らなければならない、という綴字法上の原則が存在する<sup>9</sup>。
- c. 字素  $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \dots$  の直後では上記の原則が働かないから、これらの字素は母音終わりでない。すなわち、子音終わりである。ゆえに、これらの字素の音価は  $\langle V_a C \rangle$  である<sup>10</sup>。

この結論によって恣意性を排除した音価の推定が可能となり、先行研究で推定された音価の多くが改められた。例えば、上に挙げた字素 夫 は母音  $a$  終わりの字素の直後にのみ立ちえ、かつこの字素の直後には  $a, u, i, e$  等さまざまな母音の音価をもつ字素が立ちうることから音価は  $\langle a\bar{f} \rangle$  でなければならず、同様にして 生 の音価は  $\langle ab \rangle$ , カ は  $\langle \bar{a}q \rangle$ , 欠 は  $\langle oq \rangle$ , 杏 は  $\langle u\bar{i} \rangle$ , 化 は  $\langle ir \rangle$  でなければならない<sup>11</sup>。

以下では、大竹 (2014) の成果に基づいて契丹語・契丹小字の特徴を概観する。

### 1.3. 契丹小字の文字論的特徴

契丹小字の字素は、その表音のタイプに応じて V, VC, VCC, CV, CVC (V は母音、

<sup>7</sup> 研究の予備的段階として、堅実な足がかりとなることが期待できる契丹小字で表記された漢字音の分析を行い、そこから母音の音価をもつと考えられるもの、子音+母音の音価をもつと考えられるもの、母音+子音の音価をもつと考えられるもの等を割り出している。

<sup>8</sup>  $V_a, V_\beta, V_\gamma, V_\delta, \dots$  は相異なる任意の母音。ただしここでは説明を簡便化している部分があり、音価が近い母音  $\bar{a}$  と  $\bar{e}$  および  $\bar{i}$  と  $u$  のそれぞれの直後に立ちうる字素は共通している。

<sup>9</sup> この綴字規則は、例えば  $\langle C_i V_a - V_a C_2 \rangle$  という字素連続によって  $/C_i V_a C_2/$  という音連続が表されていることを意味する。このような母音の重複現象の存在自体は契丹文字研究小組 (1977: 35, 91), 清格爾泰 (2002: 16), 愛新覺羅 (2004a: 23) 等ですでに言及されている。

<sup>10</sup> この結論は漢字音の契丹小字表記の分析結果とも一致する。

<sup>11</sup> このようにして音価が推定された字素の一部を附表に示す。ただし、子音の音価はこの方法によって決まるものではなく、別の推定方法に拠って推定したものである。

Cは子音。ここでは半母音をCに含める)等)に分類される。

契丹小字のシステムの根幹をなす字素は、VとVCである。契丹小字の音節格子表(syllabary)のうち両者に関する部分はあきまが少なく(附表参照)、両者の組合せで契丹語の可能な音連続はすべて表記することができると考えられるからである。一方、CVやCVC、VCC等は散発的にしか存在せず、契丹小字にとっては二次的な存在でしかない。これらの字素は表語的な(logographic)使用を目的として、あるいは字を構成する字素数を減らして表記の手間を省くために非体系的に制作されたものと思われる。

音節文字を使用する言語でしばしば見られるように、契丹語・契丹小字においても、その文字体系で単純には表せない音連続を表記するために「捨て母音(dead vowel)」と呼ばれるような発音されない母音を添える方策が採られた。契丹小字は上記のようにVC(やV)という母音先行型の音節文字を主体とする文字体系であるので、語頭子音や子音の直後の音節頭子音は(該当するCVやCVCの字素が存在する場合を別にして)字素<eC>を用いて表記される(表2)<sup>12</sup>。これは、CVのように母音後続型の音節文字を基本とする文字体系であるキプロス音節文字で語末子音を字素<Ce>を用いて表記する(例えば*tos*を<to-se>と表記する)のと同じように鏡像関係にある。

表2 「捨て母音」の例

	小字表記	翻字	転写	gloss	備考
	𐰽𐰺	<i>es-ur</i>	<i>sur</i>	夜	WM <i>sōni</i>
	𐰽𐰻	<i>eb-as</i>	<i>bas</i>	また	WM <i>basa</i>
	𐰽𐰼	<i>eg-ur</i>	<i>gur</i>	国	Manj. <i>gurun</i>
cf.	𐰽𐰽	<i>es-en</i>	<i>esen</i>	寿	WM <i>esen</i>
	𐰽𐰾𐰽	<i>eb-eg-eñ</i>	<i>ebgeñ</i>	人名	阿保護 (* <i>e.bay.giēn</i> )
	𐰽𐰿𐰽	<i>ej-eg-en</i>	<i>jegen</i>	左	WM <i>jegün</i>

契丹小字の綴字法のもう一つの大きな特徴は、(2b)で示した、母音終わりの字素V、CVの直後には、原則としてその母音と同一ないし類似の母音始まりの字素VC、VCCを綴らなくてはならないという母音重複規則の存在である。コーダの位

<sup>12</sup> ただし、前舌狭母音*i, ü*の前の頭子音は字素<iC>を用いて表記されることもある。例えば、奚雨<*ib-in*>/bin/「賓(\**biēn*)」、cf.丹雨<*eb-in*>/bin/「*id*」。

なお、大竹(2014)で<eC>の音価をもつとされる字素の多くには、多くの先行研究が<C>(あるいは<CV>)の音価を推定している。これに<eC>の音価を認める議論は大竹(2014: 41-45)を参照。ただし字素止、令、来、仄や傘、去等に<ep>、<et>、<eč>、<ek>や<ez>、<ev>等の音価を認めるのは問題がないわけではない。契丹語では強子音*p, t, c, k*は語頭にしか立たないと考えられ(武内2015)、漢語音専用の*z, v*等も音節頭子音でのみ用いられるものだからである。ただ、このような音節頭子音を表す用法しか見られない字素に<eC>の音価を認めるか<C>の音価を認めるかといった議論は本稿の議論には直接支障がないため、大竹(2014)に拠って一律に<eC>と解釈しておく。

置にある半母音 *j, ɣ* の直後でも同様の原則がはたらく (表3)。

表3 母音重複規則の例

小字表記	翻字	転写	gloss
又丸夫	<i>eš-ā-aí</i>	<i>sāí</i>	郎君 (男性称号)
丹及子丹又	<i>eb-ō-ol-eb-er</i>	<i>bölber</i>	なった
先安丹又	<i>tū-ur-eb-er</i>	<i>türber</i>	卒去した
穴尖化丹又	<i>ek-uj-ir-eb-er</i>	<i>kujrber</i>	至った
又免丸	<i>taɣ-ul-ā</i>	<i>taɣlá</i>	兔

#### 1.4. 契丹語の音韻論的一特徴

前述のように契丹小字は母音先行型の音節文字を主体とする文字体系であるが、このような文字体系は類型論的に非常に稀である。契丹人がこのような文字体系を創出した背景には、契丹語の音韻的な特徴が関与していたと考えられる。

表4には契丹語とモンゴル諸語との同源語をいくつか示した。現代モンゴル語では、第二音節以降の母音が弱化したことにより、かつて存在した語末の短母音が消失してすべての語が子音 (または長母音) 終わりとなっているが、表4からわかるように、契丹語も同様の変化を経ているとみられる。この変化は単に語末に限らず、すべての形態素末が子音 (または長母音) で終わるように音韻体系の改変が生じている。

表4 語末短母音消失の例<sup>13</sup>

小字表記	翻字	転写	gloss	WM	MM	Mong.
雨北	<i>dō-or</i>	<i>dōr</i>	下	<i>doora</i>	<i>doro</i>	<i>dər</i>
介安	<i>qaɣ-ur</i>	<i>qaɣr</i>	秋	<i>qabur</i>	<i>qabur</i>	<i>xabār</i>
土早	<i>eɣ-ul</i>	<i>eɣl</i>	雲	<i>egüle</i>	<i>e'üle</i>	<i>u:l</i>
又早	<i>ū-ul</i>	<i>ūl</i>	冬	<i>ebül</i>	<i>übül</i>	<i>oböl</i>
丹冬	<i>eb-as</i>	<i>bas</i>	また	<i>basa</i>	<i>basa</i>	<i>bas</i>
又土卡	<i>eš-eɣ-us</i>	<i>šeɣs</i>	露	<i>sigüsü</i>	—	<i>ju:s</i>
止安全	<i>ep-ur-es</i>	<i>purs</i>	後継	<i>üres</i>	—	<i>urs</i>
今杏	<i>es-uñ</i>	<i>suñ</i>	夜	<i>söni</i>	<i>söni</i>	<i>son ~ fon</i>

<sup>13</sup> モンゴル文語の転写形式は内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所編 (1999) に拠る。ただし、中間語未形を示すために用いられる “\_” (アンダーバー) は省略した。現代モンゴル語形も同書の発音表記に拠る。中期モンゴル語の欄には漢字文献である『元朝秘史』および甲種本『華夷訳語』の形式をローマ字転写によって示す。転写方式は栗林・確精扎布編 (2001) および栗林編 (2003) に拠った。なお、契丹語形に関して、WM *qabur* との同定は豊田 (1997: 34, 1998: 78f), WM *egüle* との同定は即実 (1996: 3, 282), WM *ebül* との同定は村山 (1951: 61) および契丹文字研究小組 (1977: 90), WM *basa* との同定は王弘力 (1984: 68), WM *sigüsü* 「液汁」との同定は呉英喆 (2007: 100), WM *üres* との同定は愛新覚羅・吉本 (2011: 141), WM *söni* との同定は劉鳳翥ほか (1995: 324f) に拠る。



契丹語はこのような音韻体系をもち、かつ膠着語的性格の強い接尾辞型の言語であるが、このような言語において母音先行型の音節文字を用いると、同一の語幹は(特殊な変化をする場合を除いて)どのような語尾が後続しようと常に同一の綴りで表記できるという利点がある(表5)。語彙的意味を担う語幹の視覚的同一性が保証されることによって「語」の認知がなされやすく、契丹語のような言語にとっては母音後続型の音節文字よりも適しているのである<sup>14</sup>。

表5 契丹語動詞パラダイムの一部 (( ) は挿入母音)

	/bōl-/	なる	/kuḡr-/	至る	/uḡw-/	与える
/-r/	丹及子又	<i>bōl-(e)-r</i>	𐰺𐰺𐰽𐰾 又	<i>kuḡr-(e)-r</i>	𐰺𐰽	<i>uḡ-(u)-r</i>
/-br/, /-lr/	丹及子丹又	<i>bōl-b(e)r</i>	𐰺𐰺𐰽𐰾丹 又	<i>kuḡr-b(e)r</i>	𐰺𐰽𐰾 又	<i>uḡ-(u)-l(e)r</i>
/-ūj/	丹及子及羽	<i>bōl-ūj</i>	𐰺𐰺𐰽𐰾及羽	<i>kuḡr-ūj</i>	𐰺𐰽及羽	<i>uḡ-ūj</i>
/-i/	丹及子关	<i>bōl-i</i>	𐰺𐰺𐰽𐰾关	<i>kuḡr-i</i>	𐰺𐰽	<i>uḡ-ūj</i>
/-i/	丹及企	<i>bōl &lt; *bōl-i</i>	𐰺𐰺𐰽𐰾𐰽	<i>kuḡj &lt; *kuḡr-i</i>	𐰺𐰽	<i>uḡ-(u)-i</i>
/-V/	丹及子北	<i>bōl-ēl</i>	𐰺𐰺𐰽𐰾北	<i>kuḡr-ēl</i>	𐰺𐰽北	<i>uḡw-ēl</i>
/-sV/	丹及平北	<i>bōl-sēl</i>	𐰺𐰺𐰽𐰾𐰽北	<i>kuḡr-sēl</i>	𐰺𐰽𐰾北	<i>uḡ-(u)-sēl</i>

## 2. V, CV を表す字素の母音の長さ

契丹語とモンゴル諸語との間には一定程度の同源語が発見されているが、ごく近年まで、両者の間に音対応規則を帰納しようという比較言語学的試みはほとんど成功してこなかった<sup>15</sup>。近年、大竹(2013)は同源語の比較から契丹語に長母音が存在すること、契丹小字のVを表す字素(以下、V型字素)や(少なくとも一部の環境で)CVを表す字素(以下、CV型字素)によって長母音が表記されていることを初めて論証した。しかし、その論証過程や結論には不十分な部分があるので、本節では改めてV型字素やCV型字素の母音が長母音であることを、同源語との比較に加えてテキストでの分布特徴から示したい。

### 2.1. V型字素の母音の長さ

契丹小字のV型字素を表6に示す。以下ではこれらの字素が常に長母音を表すことを論証する。

<sup>14</sup> 他に考えられる要因として、契丹小字の創製に関与したとされる「ウイグルの文字」の影響が考えられる。この文字が何を指すのかについては意見が分かれるが、突厥文字は母音先行型の音節文字的な特徴を備えており、考慮に値する。

<sup>15</sup> 成功してこなかった理由の一つは、同源語の認定に無理があるような語までも同源語と認めてしまった結果、不規則な音対応や不自然な音変化を想定しなくてはならなかったからである。

表6 V型字素と推定調音位置（括弧書きは漢語の表記に専用する字素）

	前舌		非前舌	
	非円唇	円唇	非円唇	円唇
狭	央 <i>i</i>	央 <i>ü</i>	(央 <i>i</i> )	央 <i>u</i>
半狭	央 <i>ē</i>	央 <i>ö</i>	央 <i>e</i>	央 <i>ü</i>
半広	央 <i>ā</i>			央 <i>o</i>
広			央 <i>a</i>	

## 2.1.1. 同源語における対応

モンゴル諸語との同源語において、契丹小字でV型字素が用いられる位置と、現代モンゴル語等で（母音間の子音の脱落によって生じた）二次的長母音（あるいは二重母音）がある位置とが対応する（表7）。この対応関係は、V型字素が長母音を表記するために使用されていることを強く示唆する。なお、例外については2.3節で扱う。

表7 V型字素と二次的長母音の対応例<sup>16</sup>

小字表記	翻字	転写	gloss	WM	MM	Mong.
𐰽𐰺	<i>ām-ā</i>	<i>āmā</i>	羊	<i>imaya</i>	<i>ima'a</i>	mɑ:
~ 𐰽𐰺	~ <i>ām-ā</i>	~ <i>āmā</i>				
𐰽𐰺𐰺	<i>et-āq-ā</i>	<i>tāqā</i>	鶏	<i>takiya</i>	<i>takiya</i>	tæxiɑ
𐰽𐰺𐰺	<i>es-āq-ā</i>	<i>sawā</i>	猛禽	<i>sibayu</i>	<i>sibarwu</i>	ʃubʊ:
𐰽𐰺	<i>čal-ā</i>	<i>čalā</i>	石	<i>čilayu</i>	<i>čilawu</i>	ʃʊlʊ:
𐰽𐰺𐰺𐰺	<i>eb-ār-ā-an</i>	<i>bārān</i>	右	<i>barayun</i>	<i>bara'un</i>	baru:n
~ 𐰽𐰺𐰺𐰺	~ <i>eb-ār-ā-an</i>	~ <i>bārān</i>				
𐰽𐰺𐰺	<i>taq-ul-ā</i>	<i>taqlā</i>	兔	<i>taulai</i>	<i>taulai</i>	tu:læ:
𐰽𐰺	<i>ed-ā</i>	<i>dā</i>	敵	<i>dayin</i>	<i>dayyin</i>	dæ:n
𐰽𐰺	<i>es-ā</i>	<i>sā</i>	良い	<i>sayin</i>	<i>sayi</i>	sæ:n
𐰽𐰺	<i>ū-ud</i>	<i>ū(-d)</i>	上の	<i>öge(-de)</i>	<i>öe(-de)</i>	ɑ:(d)
𐰽𐰺	<i>er-ē</i>	<i>erē</i>	今	<i>edüge</i>	<i>edöe</i>	Dag. edē

<sup>16</sup> WM *imaya* 「山羊」との同定は契丹文字研究小組（1977: 92）、WM *takiya* との同定は（ibid.: 64）、WM *sibayu* との同定は愛新覚羅（2004a: 76）、WM *barayun* との同定は即実（1996: 658）、WM *taulai* との同定は契丹文字研究小組（1977: 64）、WM *dayin* との同定は即実（1996: 247）、WM *sayin* との同定は（ibid.: 266）、WM *edüge* との同定は豊田（1985）に拠る。なお、Khit. *ūd* 「上の」の *-d* は形容詞派生接尾辞で、WM *-dul-dū* に対応する。Khit. *erē* < \**edüye* 「今」については、長母音が後続する母音間の *-d-* のロータリズムを想定する（cf. 3.2 節の序数詞接尾辞 \**-duyar/-düyer* > Khit. *-rūr*）。



### 2.1.2. V 型字素の分布特徴

V 型字素は字頭・字中・字末どの位置においても使用される。ところが、前述のように契丹小字は VC のような母音先行型の音節文字を主体とする文字体系であるから、仮にこの文字体系が母音の長短を書き分けないのであれば、V 型字素が必要となるのは VC 型字素によって表記できない語末の母音を表記する場合のみであるはずである。したがってそのような場合には字頭・字中の V 型字素は余剰な母音表記とみななければならない<sup>17</sup>。しかし、V 型字素は同一語の表記において一貫して表記されるものであり、V 型字素の使用を随意的で余剰な母音の表記とみなすことはできない<sup>18</sup>。しかも、1.4 節で示したように契丹語では第二音節以降の語末短母音が消失する音変化があったとみられるため、契丹語に長母音が存在しなかったのであれば、(単音節語を除いて) 字末に V 型字素が立つこともないはずである。

このように契丹語に長母音が存在し、かつ契丹小字に母音の長短の書き分けが存在して V 型字素が長母音を表記するために使用されていると認めないかぎり、V 型字素の分布特徴はうまく説明されない。

なお、V 型字素は 1 つで長母音を表すので、同一の V 型字素が連続されることは原則としてないが、漢語去声字の特殊表記はその例外である(表 8)。この表記は、漢語の去声字を表記する際に主母音またはコーダの半母音と一致する V 型字素を重複させて綴る(沈鍾偉 2012) というものだが、漢語去声字が常に重複形で綴られるわけではなく、あくまでも随意的な特殊表記であって、V 型字素 1 つで長母音を表すことを否定する根拠となるようなものではない<sup>19</sup>。

<sup>17</sup> 基底言語が非語頭においても頭子音ゼロの音節を許容するならば、母音の長短を区別しない母音先行型の音節文字体系においても字頭・字中において V 型字素が立ちうる状況が想定される。例えば、<V-VC> という字素連続が /V.VC/ という頭子音ゼロの音節を含む音連続を表記したものと考えるのである。しかしこのように考えると、漢語の「安(\*an)」「三(\*sam)」など明らかに原語で 1 音節であるものを 𐰽𐰺𐰽 <a-an> /a.an/, 𐰽𐰺𐰽𐰽 <es-a-am> /sa.am/ のように 2 音節で表記していることになる。

<sup>18</sup> ごく僅かな語彙においては綴字のゆれが観察されるが、このようなゆれは語彙の個別的な問題であり、綴字法全体の問題とみなすべきものではない。例えば、以下のようなゆれが見られる。

(a) 𐰽𐰺𐰽 <ord-ū> /ordū/ ~ 𐰽𐰺𐰽𐰽 <ō-ord-ū> /ōrdū/ 「オールド」

(b) 𐰽𐰺𐰽𐰽 <ed-ärd> /dērd/ ~ 𐰽𐰺𐰽𐰽𐰽 <et-ē-ärd> /dērd/ 「南の」

<sup>19</sup> また、このような V 型字素の重複形は、通常の表記だけでなく別の去声専用表記(当時すでに音学的には消失していた子音 *y* を含む VC 型字素(\**Vy* > *V̄*) を用いる方法。表 8 参照)とも交替可能なので、音韻論的な「超長母音」を表記したと考えるものでもない。漢語去声字の表記以外に、以下の語にも V 型字素の連続が見られるが、いずれも綴字上のゆれがある。

(a) 𐰽𐰺𐰽𐰽 <ō-ō-ol> ~ 𐰽𐰺𐰽𐰽𐰽 <ō-ol> /ōl/ 「就いて」

(b) 𐰽𐰺𐰽𐰽 <ep-ō> ~ 𐰽𐰺𐰽𐰽𐰽 <ep-ō-ō> /pō/ 「猿」

(a) は動詞語幹 *ō-* に副動詞接尾辞 *-ol* (/Vl/) (3.5 節参照) を附加したもので、このような語構成意識が 𐰽𐰺𐰽𐰽 <ō> を重複表記させているものと思われる。(b) の語源は不明なため、V 型字素を重複表記する理由も定かでない。

表8 V型字素に関する漢語去声字の特殊表記

漢字	元代音	去声に独自の表記			通常の表記		
		小字表記	翻字	転写	小字表記	翻字	転写
部	*bu	𠬪𠬪𠬪	eb-ū-ū	bū <sup>Q</sup>	𠬪𠬪	eb-ū	bū
		𠬪𠬪	eb-uy	bū <sup>Q</sup>			
騎	*gi	𠬪𠬪𠬪	eg-i-i	gī <sup>Q</sup>	* 𠬪𠬪	eg-i	gī
		𠬪𠬪	eg-iy	gī <sup>Q</sup>			
校	*giau	𠬪𠬪𠬪	eg-äü-ü	gäu <sup>Q</sup>	𠬪𠬪	eg-äü	gäu
大	*daj	𠬪𠬪𠬪	ed-aj-i	daj <sup>Q</sup>	𠬪𠬪	ed-aj	daj
興	*xiŋ	𠬪𠬪𠬪	ek-i-iŋ	kiŋ <sup>Q</sup>	𠬪𠬪	ek-iŋ	kiŋ

## 2.2. CV型字素の母音の長さ

現段階で音価が推定されている CV 型字素を表9に示す。前述のように CV 型字素は契丹小字の体系の中では二次的な存在であり、契丹語で可能な子音+母音の音連続に比して、実際に存在する字素の数はかなり少ない。これらの字素のほとんどが単独で1字（1語）として使用される例があり、元来表語的な用途のためにつくられたことを窺わせる。

表9 CV型字素

母音	小字表記とその翻字表記
a	𠬪 tā, 𠬪 cā, 𠬪 bā, 𠬪 dā, 𠬪 jā, 𠬪 qā, 𠬪 nā
ä, ě	𠬪 kē, 𠬪 qǎ, 𠬪 qǎ, 𠬪 mā
o	𠬪 pō, 𠬪 tō, 𠬪 dō, 𠬪 qō, 𠬪 sō
ü, u	𠬪 pū, 𠬪 fū, 𠬪 tū, 𠬪 kū, 𠬪 dū, 𠬪 jū, 𠬪 qū, 𠬪 sū, 𠬪 lū, 𠬪 mū
ü	𠬪 sū
i	𠬪 bī, 𠬪 dī, 𠬪 jī
ī	𠬪 jī, 𠬪 sī, 𠬪 sī
e	𠬪 tē, 𠬪 kē, 𠬪 gē, 𠬪 mē

CV 型字素の母音も V 型字素と同様に長母音であることを以下に示す。

### 2.2.1. 同源語における対応

モンゴル諸語との同源語において、契丹小字で CV 型字素が用いられる位置と、現代モンゴル語等で二次的長母音がある位置とが対応する（表10）。例外については2.3節で扱う。

表 10 CV 型字素と二次的長母音の対応例<sup>20</sup>

小字表記	翻字	転写	gloss	WM	MM	Mong.
𐰇	<i>qā</i>	<i>qā</i>	可汗	<i>qaʻan</i>	<i>qaʻan</i>	xɑ:n
𐰇-	<i>jā-</i>	<i>jā-</i>	告げる	<i>jīya-</i>	<i>jī'a- ~ ja'a-</i>	dʒɑ:-
𐰇子-	<i>dō-ol-</i>	<i>dōl-</i>	聞く	<i>duʻul-</i>	<i>duʻul-</i>	du:l-
𐰇	<i>kū</i>	<i>kū</i>	人	<i>kümün</i>	<i>güü</i>	Kalm. <i>kün</i>

### 2.2.2. CV 型字素の分布特徴

CV 型字素によって表記される子音 + 母音の音連続は、字素 <eC> と V 型字素の連続によって表記される子音 + 母音の音連続と互換可能である (表 11)。V 型字素は長母音を表すので、それと交替可能な CV 型字素に含まれる母音も長母音を表していると考えられる。また、表 11 のように CV 型字素は字末でも使用されるが、契丹語では語末に短母音が立つことがないので、この点からもやはり長母音を想定しなければならない。

表 11 CV 型字素に関する同語異綴

小字表記	翻字	転写	小字表記	翻字	転写	gloss
又刃友	<i>em-ür-jī</i>	<i>mürjī</i>	又刃来关	<i>em-ür-eč-i</i>	<i>mürjī</i>	<i>mürj-</i> の副動詞形
止失丞	<i>ep-ō-sū</i>	<i>bōsū</i>	丹失余失	<i>eb-ō-ex-ū</i>	<i>bōzū</i> <sup>21</sup>	别胥 (女性称号)

また、CV 型字素に母音が同じ V 型字素が連続される例は原則として観察されないが、これは V 型字素の連続が原則として観察されないのと並行的であり、かつ、その例外となる漢語去声字の特殊表記 (沈鍾偉 2012, 表 12) も V 型字素のそれと並行的な現象を示す (cf. 表 8)。

表 12 CV 型字素に関する漢語去声字の特殊表記

漢字	元代音	去声に独自の表記			通常の表記		
		小字表記	翻字	転写	小字表記	翻字	転写
下	*xja	𐰇	<i>qā-ā</i>	<i>qā<sup>2</sup></i>	𐰇	<i>qā</i>	<i>qā</i>
副	*fu	𐰇	<i>pū-ū</i>	<i>pū<sup>0</sup></i>	𐰇	<i>pū</i>	<i>pū</i>
戸	*xu	𐰇	<i>qū-ū</i>	<i>qū<sup>0</sup></i>	*𐰇	<i>qū</i>	<i>qū</i>

<sup>20</sup> WM *qaʻan* との同定は契丹文字研究小組 (1977: 67), WM *jīya-* との同定は宝玉柱 (2005: 132), WM *kümün* との同定は豊田 (1991b: 110) に拠る。

<sup>21</sup> 契丹小字文献では、しばしば、語頭の弱子音 *b, d, j, g* (および稀に語中の頭子音 *b, d*) を強子音 *p, t, ʃ, k* と書き分けずに字素 止 <ep>, 今 <et>, 来 <ei>, 入 <ek> を用いて表記することがある。例えば、丹失余失 *bōzū* 「别胥」は 止失余失とも綴られる。この語頭における強子音と弱子音の書き分けは、後期のテキストほど厳密になる傾向がある (傅林 2013)。

## 2.3. 例外に見える対応

2.1.1 節および 2.2.1 節で V 型字素や CV 型字素が用いられる位置と現代モンゴル語等における二次的長母音の位置とが原則として対応することをみた。ただし、この対応には例外があり、V 型字素や CV 型字素に対して二次的長母音が対応しない場合がある (表 13)。しかし、筆者はこれらの例でも長母音の表記を意図して V 型字素や CV 型字素が用いられていると考えたい。

表 13 V, CV 型字素と二次的長母音の対応の例外<sup>22</sup>

小字表記	翻字	転写	gloss	WM	MM	Mong.	備考
丹及子	<i>eb-ō-ol-</i>	<i>bōl-</i>	なる	<i>bol-</i>	<i>bol-</i>	bɔlɔ̃x	Sakh. <i>buol-</i> < * <i>bōl-</i>
米久	<i>ord-ū</i>	<i>ordū</i>	オールド	<i>ordo</i>	<i>ordo</i>	ord	Sakh. <i>ordū</i>
来关忝	<i>ec-ī-iš</i>	<i>āš</i>	血縁	<i>čisu</i>	<i>čisu</i>	ʃʊs	
厶北	<i>dō-or</i>	<i>dōr</i>	下	<i>doora</i>	<i>doro</i>	dɔr	
几卡	<i>kū-us</i>	<i>kūs</i>	力	<i>kücü</i>	<i>gücü</i>	xuʃ	Sakh. <i>kūs</i> , Trkm. <i>güč</i>
弓少	<i>ǰū-un</i>	<i>ǰūn</i>	夏	<i>jun</i>	<i>jun</i>	dʒun	
血岑	<i>g<sup>o</sup>ē-ēr</i>	<i>g<sup>o</sup>ēr</i>	家	<i>ger</i>	<i>ger</i>	gər	

テュルク祖語には一次的長母音 (primary long vowel) があつたとされ、のちに多くの言語では長短の区別が失われたが、サハ語 (ヤクート語) やトルクメン語ではかなり体系的に保存されているとされる (Johanson 1998: 90 等)。テュルク語族と (契丹語を含む) モンゴル語族との間には共通の語彙が見られるが、表 13 のうちそのような語はいずれもテュルク祖語で一次的長母音をもっていたと考えうるものである<sup>23</sup>。契丹語にはテュルク語の一次的長母音に対応する長母音が存在したと考えたい。

今まで、現代のモンゴル系諸言語間の比較やそれらと他のアルタイ系言語との比較からモンゴル祖語に一次的長母音を再構しようという試みも行われてはきた (例えば野村 (1959) や服部 (1959), Poppe (1962) 等) が、成功しているとはいいがたい<sup>24</sup> (Janhunen 2003: 5)。契丹語の上記のデータは、モンゴル祖語に一次的長母

<sup>22</sup> WM *ordo* との同定は王弘力 (1987: 64), WM *čisu* 「血」との同定は即実 (1988: 56), WM *kücü* との同定は大竹 (2015a), WM *jun* との同定は劉鳳翥・青格勒 (2003: 197), WM *ger* との同定は愛新覚羅 (2004b) および愛新覚羅・吉本 (2011: 138) に拠る。

<sup>23</sup> ただし、サハ語とトルクメン語では一方が長母音 (由来の母音) であっても、もう一方が短母音であり規則的に対応しない語もあり、Sakh. *buol-* < \**bōl-* 「…である、…となる」に対して Trkm. *bol-* である。

<sup>24</sup> 現代の「周縁的 (peripheral)」諸言語間における長母音の一致、例えばダグール語 *mōd* とシラ・ユグル語 (東部裕固語) *mūdin*, モンゴル語 (互助土族語) *mōdi* 「木」(WM *modu(n)*, Mong. *mōd*) やダグール語 *tāy* とシラ・ユグル語 *tāwin*, モンゴル語 *tāwun* 「5」(WM *tabu(n)*, Mong. *tab*) のような一致はむしろ稀であり、このような一致を根拠に祖形に長母音を再構するにはあまりにも多くの例外を認めなければならない。

音が存在し、契丹語がそれを保存している可能性を示唆する。モンゴル文語の形式 *doora* 「下」は散発的に一次的長母音が残存したものと考えられる<sup>25</sup>。

### 3. VC を表す字素の母音の長さ

前節で論じたように、契丹小字の字素のうち V 型字素や CV 型字素のような閉音節型の字素の母音は長母音である。それに対して、VC を表す字素（以下、VC 型字素）のように閉音節型の字素の母音は、大竹（2013）では短母音であるとされる。ところが、すべての VC 型字素の母音が短母音を表すと考えると問題が生じる部分がある。すなわち、*<eC>* の音価をもつ一部の字素が、2 系列存在することになるのである（表 14）。これらの字素はそれぞれ子音を同じくし、また母音の音色も同じと考えられるにも関わらず、互いに使用される環境が明らかに異なっており、同一の音価を設定するには大きな問題がある。

表 14 *<eC>* を表す 2 系列の字素

	<i>er</i>	<i>el</i>	<i>em</i>	<i>en</i>	<i>eñ</i>
(a)	爻	𠂔	爻	𠂔	伏
(b)	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔

本稿では、この 2 系列が母音の長さの点で異なり、(a) の系列が *<eC>* の音価をもつものに対し、(b) の系列は *<eC>* の音価をもつことを論証する。以下に (b) の系列が長母音を含むべき論拠を提示する。

#### 3.1. 形動詞接尾辞 *-ṽr* の異形態

字素 𠂔 および 𠂔 の音価が *<er>*、*<eñ>* であるならば、形動詞接尾辞 *-ṽr* の異形態がうまく説明できる（表 15）<sup>26</sup>。この接尾辞は語幹の種類によって一種の母音調和による交替形をもつが、まず複数形では *Q* 語幹（語幹末が後部軟口蓋音 *-g*、*-ʒ* であるもの）で *- 𠂔 𠂔 /-əj/*、*Q<sup>w</sup>* 語幹（語幹末が円唇化後部軟口蓋音 *-q<sup>w</sup>*、*-ʒ<sup>w</sup>* であるもの）で *- 𠂔 𠂔 /-əj/*、その他の子音語幹で *- 𠂔 𠂔 /-əj/* であり<sup>27</sup>、いずれも長母音を含む。また、*Q* 語幹の男性単数形は *- 𠂔 𠂔 /-ār/*、女性単数形は *- 𠂔 𠂔 /-āñ/* であり、*Q<sup>w</sup>* 語幹の男性単数形は *- 𠂔 𠂔 /-ōr/*、女性単数形は *- 𠂔 𠂔 /-ōñ/* なので、その他の子音語

<sup>25</sup> WM *doora* は現代モンゴル語諸方言において [d̥ɔr ~ dɔr] と発音にゆれが見られる（孫竹主編 1990: 225）。

<sup>26</sup> 契丹語の形動詞接尾辞には性・数の一致による異形式をもつものがある（愛新覚羅 2003、大竹 2015b）。以下、形態素を示す場合には男性単数形で代表させて示す。なお、女性単数形は男性単数形に *-ñ* を付したものに由来し（*r* 語幹の場合、*r* は脱落するため、*/-ṽr/ + /-ñ/ > /-ṽñ/* となる）、複数形は男性単数形に複数接尾辞を付した形式に由来する（*/-ṽr/ + /-j/ > /-ṽj/*）。

<sup>27</sup> 字素 𠂔 *<er>* は字頭で頭子音 *i* を表すために用いられ、字頭で頭子音 *j* を表すには字素 𠂔 *<ej>* が用いられるが、非字頭では *j* を表すために 𠂔 を用いるのは稀で、むしろ 𠂔 を用いる傾向がある。

幹でも男性単数形は  $-ēr$ 、女性単数形は  $-ēn$  と長母音を含む形式が予想される<sup>28</sup>。

表 15 形動詞接尾辞  $-ṽr$  の異形態

	男性単数形		女性単数形		複数形	
Q 語幹	- 刃ネ	<-ā-ar> /-ār/	- 刃出	<-ā-añ> /-āñ/	- 刃次	<-ā-aʃ> /-āʃ/
Q <sup>m</sup> 語幹	- 及北	<-ō-or> /-ōr/	- 及肉	<-ō-on> /-ōñ/	- 及州	<-ō-oʃ> /-ōʃ/
その他の子音語幹	- 込	<-ēr> /-ēr/	- 当	<-ēñ> /-ēñ/	- 芬来	<-ē-ec> /-ēj/

### 3.2. 序数詞接尾辞 $-dṽr/-rṽr$

#### 3.2.1. 異形態

字素 込 および 当 の音価が <ēr>, <ēñ> であるならば、序数詞接尾辞  $-dṽr/-rṽr$  が数詞「5」に附加されるときのみ母音の長さが異なるという不自然な異形態を認めなくてよい (表 16)<sup>29</sup>。

表 16 契丹語の序数詞

	男性形			女性形			cf. 基数詞	
	小字表記	翻字	転写	小字表記	翻字	転写	小字	転写
2	支化込	<i>eʃ-ud-ēr</i>	<i>jūdēr</i>	支化当	<i>eʃ-ud-ēñ</i>	<i>jūdēñ</i>	丕	<i>jūr</i>
3	刊化込	<i>aq-ud-ēr</i>	<i>qūdēr</i>	刊化当	<i>aq-ud-ēñ</i>	<i>qūdēñ</i>	包	<i>qūr</i>
4	谷化込	<i>ed-ud-ēr</i>	<i>dudēr</i>	谷化当	<i>ed-ud-ēñ</i>	<i>dudēñ</i>	屯	<i>dur</i>
5	令亦及北	<i>et-ad-ō-or</i>	<i>tadōr</i>	令亦及肉	<i>et-ad-ō-on</i>	<i>tadōñ</i>	𠵹	<i>taṽ</i>
	令巾及北	<i>et-od-ō-or</i>	<i>todōr</i>	令巾及肉	<i>et-od-ō-on</i>	<i>todōñ</i>		
6	左込	...-ēr	...-ēr	左当	...-ēñ	...-ēñ	𠵹	?
7	欠丹込	<i>dā-ald-ēr</i>	<i>dāldēr</i>	欠丹当	<i>dā-ald-ēñ</i>	<i>dāldēñ</i>	𠵹	<i>dil</i>
8	至化込	... <i>j-ir-ēr</i>	... <i>jirēr</i>	* 至化当	... <i>j-ir-ēñ</i>	... <i>jirēñ</i>	至	... <i>j</i>
	至谷込	... <i>j-ed-ēr</i>	... <i>jidēr</i>	* 至谷当	... <i>j-ed-ēñ</i>	... <i>jidēñ</i>		
9	𠵹込	<i>iš-er-ēr</i>	<i>išrēr</i>	* 𠵹当	<i>iš-er-ēñ</i>	<i>išrēñ</i>	𠵹	<i>iš</i>
	𠵹谷込	<i>iš-ed-ēr</i>	<i>išdēr</i>	* 𠵹谷当	<i>iš-ed-ēñ</i>	<i>išdēñ</i>		

#### 3.2.2. 同源語

契丹語の序数詞接尾辞  $-dṽr/-rṽr$  は、モンゴル文語の  $-duyar/-düger$  や中期モンゴル語の  $-duʻar/-düer$ 、ダゲール語の  $-dṽr$  と対応する (Wu & Janhunen 2010: 57)<sup>30</sup>。こ

<sup>28</sup> なお、ここでは Q 語幹、Q<sup>m</sup> 語幹、その他の子音語幹と単純化して示したが、実際には *u* 語幹および *b* 語幹には、男性母音を含む語幹の場合  $-ār \sim -ōr$ 、その他の場合  $-ēr$  が接尾する。3.5 節で扱う副動詞接尾辞  $-ṽl$  も同様。

<sup>29</sup> 契丹語の序数詞に男性形と女性形があることについては豊田 (1991a: 1f) や愛新覚羅 (2003) を参照。序数詞接尾辞の女性形  $-dṽñ/-rṽñ$  は男性形  $-dṽr/-rṽr$  に  $-ñ$  (指小辞?) を付した形式に由来する ( $-r$  は脱落する)。

<sup>30</sup> 現代モンゴル語の対応形式  $-duqar/-duqər$  は中期モンゴル語形と不規則な対応をなす。



の対応が規則的ならば、契丹語の序数詞接尾辞には現代のモンゴル系言語の二次的長母音に対応する長母音が含まれているはずである（表 17）。

表 17 契丹語とモンゴル諸語の序数詞の対応

		Khit.	WM	MM	Dag.
3	𠬞化𠬞	<i>qū-dēr</i>	<i>γurba-duγar</i>	<i>qu-tu'ar</i>	<i>g<sup>u</sup>arəb-dār</i>
4	𠬞化𠬞	<i>du-dēr</i>	<i>dörbe-düger</i>	<i>*dō-tü'er</i>	<i>durəb-dēr</i>
5	𠬞𠬞及𠬞	<i>ta-dör</i>	<i>tabu-duγar</i>	<i>dab-tu'ar</i>	<i>tāy-dār</i>
7	𠬞𠬞𠬞	<i>dāl-dēr</i>	<i>dolo-duγar</i>	<i>dolo-du'ar</i>	<i>dol-dör</i>
9	𠬞𠬞𠬞	<i>iš-rēr</i>	<i>yisü-düger</i>	<i>*yesü-dü'er</i>	<i>is-dēr</i>

### 3.3. 造格接尾辞 -*Ṽr* の同源語

契丹語の造格接尾辞 -*ṛ* <-ēr> は、モンゴル文語の -*barl/-ber*, -*iyarl/-iyer*, 中期モンゴル語の -*arl/-er*, -*iyarl/-iyer*, 現代モンゴル語の -*Ṽr* と対応する（契丹文字研究小組 1977: 85）。この対応が規則的ならば、契丹語の造格接尾辞は長母音を含んでいるはずである。

### 3.4. 接尾辞 -*ni* 附加時の綴字交替

契丹人男性の字（あごな）や契丹人女性の名は、接尾辞 -*ni* を名詞類に附加して形成されるが、母音語幹に -*ni* を附加する際、表記上は一般に語幹に字素 <*Vni*> を加えるのに対して、*e* 語幹のみは語幹末の字素 𠬞 <*ē*> を取り除いた上で 𠬞 を加える。この綴字の交替は字素 𠬞 の音価に <*ēni*> を認めなければ説明できない（表 18）。

表 18 母音語幹への接尾辞 -*ni* の附加

	語幹			男性の字／女性名		
	小字表記	翻字	転写	小字表記	翻字	転写
<i>a</i> 語幹	𠬞𠬞	<i>čal-ā</i>	<i>čalā</i>	𠬞𠬞𠬞	<i>čal-ā-añ</i>	<i>čalā-ni</i>
<i>u</i> 語幹	𠬞𠬞	<i>qar-ū</i>	<i>qarū</i>	𠬞𠬞𠬞	<i>qar-ū-uñ</i>	<i>qarū-ni</i>
<i>e</i> 語幹	𠬞𠬞𠬞	<i>ed-il-ē</i>	<i>dilē</i>	𠬞𠬞𠬞	<i>ed-il-ēñ</i>	<i>dilē-ni</i>

### 3.5. 副動詞接尾辞 -*Ṽl* の異形態

字素 𠬞 の音価が <*el*> であるならば、副動詞接尾辞 -*Ṽl* が子音語幹に附加される際の異形態をうまく説明できる（表 19）。

表 19 副動詞接尾辞 -*Ṽl* の異形態

	小字表記	翻字	転写
<i>Q</i> 語幹	- 𠬞𠬞	<i>-ā-al</i>	<i>-āl</i>
<i>Q<sup>w</sup></i> 語幹	- 𠬞𠬞	<i>-ō-ol</i>	<i>-ōl</i>
その他の子音語幹	- 𠬞	<i>-el</i>	<i>-ēl</i>

## 3.6. 与位格接尾辞附加時の綴字交替

語幹末に字素 *北* を綴る名詞類に与位格接尾辞 *-d* が附加される際、字素 *-北* を除いた上で *- 岑火 /-ēld/* が綴られる。字素 *北* の音価を  $\langle \tilde{e} \rangle$  と考えなければ、このような綴字の交替は説明できない (表 20)。

表 20 与位格接尾辞 *-d* の附加

	主格形			与位格形			
	gloss	小字表記	翻字	転写	小字表記	翻字	転写
常	令住公 <sup>北</sup>	<i>et-ül-ed-ēl</i>	<i>tüldēl</i>	令住公 <sup>岑火</sup>	<i>et-ül-ed-ē-eld</i>	<i>tüldē-d</i>	
病氣	令 <sup>北</sup>	<i>es-ēm-ēl</i>	<i>sēmēl</i>	令 <sup>岑火</sup>	<i>es-ēm-ē-eld</i>	<i>sēmē-d</i>	
cf.	朝廷 (?)	令 <sup>岑火</sup>	<i>ek-es-ey-el</i>	<i>keseyel</i>	令 <sup>岑火</sup>	<i>ek-es-ey-eld</i>	<i>keseyel-d</i>

## 3.7. 属格・対格接尾辞附加時の綴字交替

母音語幹に属格・対格接尾辞 *-n* を附加する際、*e* 語幹のみは語幹末の字素 *岑*  $\langle \tilde{e} \rangle$  を取り除いた上で *公* を綴る。字素 *公* の音価が  $\langle \tilde{e}n \rangle$  であると考えなければ、このような綴字の交替は説明できない (表 21)。

表 21 母音語幹への属格・対格接尾辞 *-n* の附加

	gloss	主格形			属格・対格形		
		小字表記	翻字	転写	小字表記	翻字	転写
<i>a</i> 語幹	石	石 <sup>岑</sup>	<i>čal-ā</i>	<i>čalā</i>	石 <sup>岑</sup>	<i>čal-ā-an</i>	<i>čalā-n</i>
<i>ā</i> 語幹	林牙 (官職名)	令 <sup>岑</sup>	<i>el-ām-ā</i>	<i>lāmā</i>	令 <sup>岑</sup>	<i>el-ām-ā-ān</i>	<i>lāmā-n</i>
<i>u</i> 語幹	民	令 <sup>岑</sup>	<i>qar-ū</i>	<i>qarū</i>	令 <sup>岑</sup>	<i>qar-ū-un</i>	<i>qarū-n</i>
<i>e</i> 語幹	今	令 <sup>岑</sup>	<i>er-ē</i>	<i>erē</i>	令 <sup>岑</sup>	<i>er-ēn</i>	<i>erē-n</i>
	于越 (男性称号)	令 <sup>岑</sup>	<i>uy<sup>w</sup>-ē</i>	<i>uy<sup>w</sup>ē</i>	令 <sup>岑</sup>	<i>uy<sup>w</sup>-ēn</i>	<i>uy<sup>w</sup>ē-n</i>
	地	令 <sup>岑</sup>	<i>new-ē</i>	<i>newē</i>	令 <sup>岑</sup>	<i>new-ēn</i>	<i>newē-n</i>
	石烈 (行政区画)	令 <sup>岑</sup>	<i>eš-ir-ē</i>	<i>širē</i>	令 <sup>岑</sup>	<i>eš-ir-ēn</i>	<i>širē-n</i>
	女真 (民族名)	令 <sup>岑</sup>	<i>jū-urj-ē</i>	<i>jūrjē</i>	令 <sup>岑</sup>	<i>jū-urj-ēn</i>	<i>jūrjē-n</i>

## 3.8. 母音縮合に関する同語異綴

契丹語の軟口蓋摩擦音  $y^{(w)}$ ,  $ɣ^{(w)}$  は少なくとも 11 世紀後半には音的に消失していた徴証があり、それに伴う綴字のゆれがしばしば見られる。『蕭関古辞墓誌銘』(1068 年)と『蕭轄底墓誌銘』(1080 年)に所見する山名 令<sup>岑</sup>  $\langle et-er-ey-ēm \rangle /tereyēm/$  は、『蕭忽突董墓誌銘』(1091 年)と『蕭敵魯墓誌銘』(1114 年)では 令<sup>岑</sup>  $\langle et-er-ēm \rangle /terēm/$  ( $\langle *terēēm \langle tereyēm \rangle$ ) と表記されている。もしも字素 *岑* の音価が  $\langle em \rangle$  であったならば、むしろ 令<sup>岑</sup>  $\langle et-er-ē-em \rangle /terēm/$  ( $\langle *terēēm \langle tereyem \rangle$ ) と表記されることが予想される。上記のテキスト間のゆれは、*岑* の音価を  $\langle \tilde{e}m \rangle$  と考えてはじめて理解できるものである。

### 3.9. $\bar{V}C$ の音価をもつ字素の分布特徴

以上の論拠により、 $\ast$ , 𐰽, 𐰾, 𐰿, 𐱀 の音価を  $\langle \bar{e}r \rangle$ ,  $\langle \bar{e}l \rangle$ ,  $\langle \bar{e}m \rangle$ ,  $\langle \bar{e}n \rangle$ ,  $\langle \bar{e}ñ \rangle$  と推定する。これらの推定音価を裏づける傍証として以下の事実を挙げることができる。

第一に、原則として 𐰾  $\langle \bar{e} \rangle$  の直後に  $\ast$   $\langle \bar{e}r \rangle$ , 𐰽  $\langle \bar{e}l \rangle$ , 𐰾  $\langle \bar{e}m \rangle$ , 𐰿  $\langle \bar{e}n \rangle$ , 𐱀  $\langle \bar{e}ñ \rangle$  が後続することがない<sup>31</sup>。これら自身が長母音を含んでいるのであれば、このような字素連続がないのはきわめて自然に説明できる。V型字素の連続やCV型字素とV型字素の連続が原則としてないことと並行的である。

第二に、原則として 𐰾  $\langle \bar{e} \rangle$  の直後に 𐰽  $\langle er \rangle$ , 𐰾  $\langle el \rangle$ , 𐰾  $\langle em \rangle$ , 𐰿  $\langle en \rangle$ , 𐱀  $\langle eñ \rangle$  が後続することもない。このような字素連続が表す音連続は、字素  $\ast$   $\langle \bar{e}r \rangle$ , 𐰽  $\langle \bar{e}l \rangle$ , 𐰾  $\langle \bar{e}m \rangle$ , 𐰿  $\langle \bar{e}n \rangle$ , 𐱀  $\langle \bar{e}ñ \rangle$  によって1字素で表すことが可能なため観察されないと考えられる<sup>32</sup>。

### 3.10. $\langle eC \rangle$ と $\langle \bar{e}C \rangle$ のねじれ

字素  $\ast$ , 𐰽, 𐰾, 𐰿, 𐱀 の音価が  $\langle \bar{e}r \rangle$ ,  $\langle \bar{e}l \rangle$ ,  $\langle \bar{e}m \rangle$ ,  $\langle \bar{e}n \rangle$ ,  $\langle \bar{e}ñ \rangle$  と推定されるのに対して、𐰽  $\langle er \rangle$ , 𐰾  $\langle el \rangle$ , 𐰾  $\langle em \rangle$ , 𐰿  $\langle en \rangle$ , 𐱀  $\langle eñ \rangle$  と推定される。

ところで、 $\langle eC \rangle$  の音価をもつ字素には語頭や子音の直後で音節頭子音を表す用法があることを1.3節で述べたが、これらの字素についてみると、少なくとも語頭に関するかぎり、頭子音  $l, m, ñ$  は字素 𐰾  $\langle el \rangle$ , 𐰾  $\langle em \rangle$ , 𐱀  $\langle eñ \rangle$  によって表記されるのに対し、頭子音  $n$  は字素 𐰿  $\langle en \rangle$  によって表記されるという「ねじれた」対応をなしている(表22)<sup>33</sup>。語頭子音  $n$  のみが字素  $\langle \bar{e}C \rangle$  を用いて表記される理由は明らかでない。

表22 語頭子音の表記法<sup>34</sup>

小字表記	翻字	転写	gloss	備考
𐰾𐰿𐰽	<i>el-äy-üq<sup>w</sup></i>	<i>läyq<sup>w</sup></i>	赤い (fem.)	掠胡 (* <i>l̥äy.xu</i> )
𐰽𐰿	<i>em-ir</i>	<i>m̄ir</i>	馬	WM <i>mori</i>
𐰽𐰿	<i>eñ-äq</i>	<i>n̄äq</i>	犬	捏褐 (* <i>n̄jã.xe</i> )
𐰾𐰿𐰽	<i>ēn-am-ur</i>	<i>namur</i>	秋	WM <i>namur</i>

<sup>31</sup> ただし、軟口蓋摩擦音  $y$  の消失に伴う字素  $\ast$   $\langle ey \rangle$  と 𐰾  $\langle \bar{e} \rangle$  の混用により、綴字のゆれとしてそのような字素連続が見られることはある。例えば、𐰽𐰿𐰽  $\langle ep-\bar{e}-\bar{e}l \rangle$  等。

<sup>32</sup> 𐰽𐰿𐰽  $\langle ney-\bar{e}-en \rangle$  /*newēn*/「地の」という表記が1例確認されるが、これは通常 𐰾𐰿  $\langle ney-\bar{e}n \rangle$  と表記される語である(表21参照)。

<sup>33</sup> 契丹語においては他のアルタイ系諸言語と同様に  $r$  が語頭に立たないため、 $r$  については未詳。

<sup>34</sup> 漢字音写「掠胡」との同定は王弘力(1986: 65), WM *mori* との同定および漢字音写「捏褐」との同定は契丹文字研究小組(1977: 64), WM *namur* との同定は豊田(1997: 34, 1998: 79)に拠る。

## 3.11. &lt;ēC&gt; の音価をもつその他の字素

上記で論じた字素に加えて、さらに 止 と 令 がそれぞれ <ēb>, <ēd> の音価をもつと考えるべき根拠がある。これらの字素はそれぞれ頭子音 *p*, *t* を表記するためにも使用される字素であるが、契丹語では強子音 *p*, *t*, *ɕ*, *k* が語頭にしか立たないと考えられるため、非字頭において使用される当該字素は *p* や *t* を表記したものと考えることができない<sup>35</sup>。以下では、字素 止, 令 が <ēb>, <ēd> の音価をもつと考える論拠を提示する<sup>36</sup>。

## 3.11.1. 複数接尾辞附加時の綴字交替

母音語幹に複数接尾辞 *-d* を附加する際、*e* 語幹のみは語幹末の字素 券 <ē> を除いた上で 令 を綴る。字素 令 の音価が <ēd> であると認めなければ、このような綴字の交替は説明できない (表 23)。

表 23 母音語幹への複数接尾辞 *-d* の附加

	gloss	小字表記	単数形		複数形		
			翻字	転写	小字表記	翻字	転写
<i>a</i> 語幹	?	育丸	<i>qar-ā</i>	<i>qarā</i>	育丸亦	<i>qar-ā-ad</i>	<i>qarā-d</i>
<i>o</i> 語幹	娘婿	朶及	...-ō	...ō	朶及亦	...-ō-od	...ō-d
<i>u</i> 語幹	オルド	米爻	<i>ord-ū</i>	<i>ordū</i>	米爻化	<i>ord-ū-ud</i>	<i>ordū-d</i>
<i>e</i> 語幹	これ、この (固有名) <sup>37</sup>	<u>券</u>	<i>ē</i>	<i>ē</i>	<u>令</u>	<i>ēd</i>	<i>ē-d</i>
		兪用 <u>券</u>	<i>ed-il-ē</i>	<i>dilē</i>	兪用 <u>令</u>	<i>ed-il-ēd</i>	<i>dilē-d</i>

## 3.11.2. 与位格接尾辞附加時の綴字交替

語幹末が *r* である一部の名詞類に与位格接尾辞 *-d* が附加される際、語幹末の *r* は脱落する。綴字上語幹末の字素が 夂 <ēr> である語に与位格接尾辞 *-d* が附加される際には、字素 夂 を除いた上で 令 を綴る。字素 令 の音価が <ēd> でなければ、このような綴字の交替は説明できない (表 24)。

<sup>35</sup> 注 21 に述べた理由により字素 止, 令 が非字頭で使用されることがあるが、これは以下で述べることは別問題である。例えば、兪半止券 (= 令半券) *delbē*, 令住令止 (= 令住止) *tüldēl*。

<sup>36</sup> 他に頭子音 *k-* を表す字素 夂 が音価 <ēg> をもつ可能性があるが、非字頭に当該字素を含む語は在証されない (*ēg* という音連続を含むと考えられる語自体が偶然在証されない)。

<sup>37</sup> 複数形 兪用令 (令用令) *dilēd* は「敵烈 (\**di. liā*)」または「敵烈德 (\**di. liā. deŋ*)」と音写される部族名で (愛新覚羅 2004a: 294ff), 単数形は人名として使用される。

表 24 *r* 語幹への与位格接尾辞 *-d* の附加

gloss	主格形			与位格形		
	小字表記	翻字	転写	小字表記	翻字	転写
(親族名称)	𐰺𐰽	...-ēr	...ēr	𐰺𐰽	...-ēd	...ē-d
異性きょうだい (複数)	𐰺𐰽𐰺𐰽	eñ-āy-eñ-ēr	nāyñēr	𐰺𐰽𐰺𐰽	eñ-āy-eñ-ēd	nāyñē-d
雲慶 (山名)	𐰺𐰽 𐰺𐰽𐰺𐰽	ey-ul pū-us-uy <sup>w</sup> -ēr	eyl pūsuy <sup>w</sup> ēr	𐰺𐰽 𐰺𐰽𐰺𐰽	ey-ul pū-us-uy <sup>w</sup> -ēd	eyl pūsuy <sup>w</sup> ē-d
cf. 軍, 戦	𐰺𐰽	čay-ur	čayr	𐰺𐰽	čay-ud	čay-d
使者	𐰺𐰽𐰽	jal-ā-ar	jalār	𐰺𐰽𐰽	jal-ā-ad	jalā-d

### 3.11.3. 同語異綴

*eb* という音連続を含む語 𐰺𐰽𐰽 (今券丹) /*dēb*/ はその生起位置から, 𐰺𐰽 (今止) と綴られる語と同一語と考えられる。字素 𐰽 の音価が <*eb*> であれば, この同語異綴を説明することができる (表 25)。

表 25 字素 𐰽 に関する同語異綴

小字表記	翻字	転写	小字表記	翻字	転写	gloss
𐰺𐰽	<i>ed-ēb</i>	<i>dēb</i>	𐰺𐰽𐰽	<i>ed-ē-eb</i>	<i>dēb</i>	?

## 4. おわりに

本稿では契丹小字における母音の長さの書き分けについて論じた。母音の長さに関する契丹小字の特徴は, 以下の 2 点に集約される。

- (3) V, CV のように開音節型の字素の母音は長母音を表記している。
- (4) VC のように閉音節型の字素の母音は基本的には短母音であるが, 長母音 *e* + 子音を表す字素も一部の子音について存在する。

また, 契丹語の音韻に関しては比較言語学的観点から以下の点を指摘できる。

- (5) 現代モンゴル語等の二次的長母音に対応する長母音が存在する。
- (6) 現代モンゴル語等の二次的長母音には対応しない長母音も存在する。これはモンゴル祖語に存在した一次的長母音に対応する可能性がある。

2 節や 3 節でみたように, 契丹語を歴史比較言語学的に扱う場合には契丹語に母音の長短の対立があることを想定するのが不可欠であり, 3 節でみたように, 共時的に契丹語の形態論を扱う場合にも母音の長短の把握は欠かせない。現段階では契丹語がまだ解読の途上にあるため, 同定されている同源語の量など制限が多く, 本稿の論証が必ずしも十分とは言えないが, 今後の研究の進展によって上記の仮説はさらに検証されていくものと思われる。

附表 契丹小字の V, VC, VCC 型字素の音節格子表

	a-	ā-	ǎ-	o-	ū-	u-	ü-	i-	e-	ǐ-	その他
-[ ]	𐰇	𐰈	𐰉	𐰊	𐰋	𐰌	𐰍	𐰎	𐰏	𐰐	𐰑, 𐰒, 𐰓
-i	𐰔	𐰕		𐰖	𐰗	𐰘			𐰙		
-y	𐰚	𐰛	𐰜						𐰝		𐰞 <i>ev</i>
-p									𐰟		
-t									𐰠		
-č									𐰡		
-k									𐰢		
-b	𐰣			𐰤	𐰥			𐰦	𐰧	𐰨	
-d	𐰩	𐰪		𐰫	𐰬			𐰭	𐰮	𐰯	
-j	𐰰	𐰱		𐰲	𐰳				𐰴		
-g								𐰵	𐰶		
-g <sup>w</sup>						𐰷	𐰸				
-q	𐰹	𐰺									
-q <sup>w</sup>	𐰻			𐰼	𐰽		𐰾				
-s	𐰿	𐱀		𐱁	𐱂				𐱃		𐱄 <i>ez</i> , 𐱅 <i>ec</i>
-š	𐱆	𐱇						𐱈	𐱉		𐱊 <i>ež</i>
-f	𐱋			𐱌	𐱍				𐱎		
-r	𐱏	𐱐		𐱑	𐱒	𐱓	𐱔	𐱕	𐱖	𐱗	
-l	𐱘	𐱙		𐱚	𐱛	𐱜	𐱝	𐱞	𐱟	𐱠	𐱡 <i>öl</i> , 𐱢 <i>eil</i>
-m	𐱣	𐱤		𐱥	𐱦	𐱧		𐱨	𐱩	𐱪	
-n	𐱫	𐱬		𐱭	𐱮	𐱯	𐱰	𐱱	𐱲	𐱳	𐱴 <i>ön</i>
-ñ	𐱵			𐱶	𐱷				𐱸	𐱹	
-ŋ	𐱺	𐱻	𐱼					𐱽	𐱾		
-ŋ <sup>w</sup>		𐱿		𐲀	𐲁	𐲂	𐲃				
-y								𐲄	𐲅		
-y <sup>w</sup>						𐲆					
-ʒ	𐲇	𐲈									
-ʒ <sup>w</sup>				𐲉	𐲊		𐲋				
-nd	𐲌			𐲍	𐲎				𐲏		
-rd		𐲐		𐲑	𐲒						𐲓 <i>urj</i>
-ld	𐲔			𐲕					𐲖		𐲗 <i>ols</i>

(網掛け部分は音韻論的理由やその他の理由により当該音連続を表す字素がないと予想されるもの。空白部分は今後の研究の進展により該当する字素が発見される可能性がある。)



## 参 照 文 献

- 愛新覚羅烏拉熙春 (2003) 「契丹語的序数詞」『東亞文史論叢』2003: 55-62. (愛新覚羅 (2004a: 179-187) に再録)
- 愛新覚羅烏拉熙春 (2004a) 『契丹語言文字研究』京都: 東亞歴史文化研究会.
- 愛新覚羅烏拉熙春 (2004b) 「契丹横帳考——兼論帳、宮、院之關係」『立命館文学』584: 27-36. (『遼金史与契丹女真文』1-10. 京都: 東亞歴史文化研究会. 2004年に再録)
- 愛新覚羅烏拉熙春・吉本道雅 (2011) 『韓半島から眺めた契丹・女真』京都: 京都大学学術出版会.
- 宝玉柱 (2005) 「契丹小字 183 号 227 号原字研究」『中央民族大学学报 (哲学社会科学版)』2005(2): 130-136.
- 清格爾泰 (2002) 『契丹小字釈読問題』府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 傅林 (2013) 「論契丹小字与回鶻文字的關係及其文字改革」『華西語文学刊』8: 58-67.
- 服部四郎 (1959) 「蒙古祖語の母音の長さ」『言語研究』36: 40-54. (『服部四郎論文集』第3巻 アルタイ諸言語の研究 III: 90-111. 東京: 三省堂. 1989年に再録)
- Janhunen, Juha (2003) Proto-Mongolic. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 1-29. London; New York: Routledge.
- 即実 (1988) 「從 父 丹カ 説起」『内蒙古大学学报 (哲学社会科学版)』1988(4): 55-69.
- 即実 (1996) 『謎林問徑——契丹小字解読新程』瀋陽: 遼寧民族出版社.
- Johanson, Lars (1998) The history of Turkic. In: Lars Johanson and Éva Á. Csátó (eds.) *The Turkic languages*, 81-125. London; New York: Routledge.
- Kane, Daniel (2009) *The Kitan language and script*. Leiden; Boston: Brill.
- 栗林均 (編) (2003) 『華夷訳語』(甲種本) モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター叢書第10号. 仙台: 東北大学東北アジア研究センター.
- 栗林均・確精扎布 (編) (2001) 『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター叢書第4号. 仙台: 東北大学東北アジア研究センター.
- 劉鳳翥ほか (1995) 「契丹小字解読五探」『漢学研究』13(2): 313-347.
- 劉鳳翥・青格勒 (2003) 「契丹小字《宋魏国妃墓誌銘》和《耶律弘用墓誌銘》考釈」『文史』2003(4): 194-208.
- 村山七郎 (1951) 「契丹字解読の方法」『言語研究』17/18: 47-70.
- 内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所 (編) (1999) 『蒙漢詞典』増訂本. 呼和浩特: 内蒙古大学出版社.
- 野村正良 (1959) 「モンゴロ方言の長母音と原蒙古語に於ける長母音存在の可能性に就いて」名古屋大学文学部 (編) 『名古屋大学文学部十周年記念論集』621-632. 名古屋: 名古屋大学文学部.
- 大竹昌巳 (2013) 「契丹語的元音長度——兼論契丹小字的拼写規則」『華西語文学刊』8: 86-96.
- 大竹昌巳 (2014) 「契丹小字の体系的解読の試み」修士論文, 京都大学.
- 大竹昌巳 (2015a) 「契丹語の奉仕表現」『KOTONOHA』149: 1-15.
- 大竹昌巳 (2015b) 「契丹語における性・数の一致と文法的性の存在」『日本言語学会第150回大会予稿集』368-373.
- Poppe, Nicholas (1962) The primary long vowels in Mongolian. *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 63: 3-19.
- 契丹文字研究小組 [清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢蒞里] (1977) 「關於契丹小字研究」『内蒙古大学学报 (哲学社会科学版)』1977(4), 契丹小字研究專号.
- 契丹文字研究小組 [清格爾泰・陳乃雄・邢蒞里・劉鳳翥・于宝麟] (1978) 「契丹小字解読新探」『考古学報』1978(3): 353-387.
- 契丹文字研究小組 [清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼] (1985) 『契丹小字研究』北京: 中国社会科学出版社.
- 沈鍾偉 (2006) 「遼代北方漢語方言的語音特徵」『中国語文』2006(6): 483-498.
- 沈鍾偉 (2012) 「契丹小字漢語音訳中的一个声調現象」『民族語文』2012(1): 39-50.
- 白鳥庫吉 (1898) 「契丹女真西夏文字考」『史学雑誌』9 (11, 12). (『白鳥庫吉全集』第5巻 塞外民族史研究 下: 45-68. 東京: 岩波書店. 1970年に再録)
- 白鳥庫吉 (1910-13) 「東胡民族考」『史学雑誌』21 (4, 7, 9), 22 (1, 5, 11, 12), 23 (2, 3, 10-12), 24 (1, 7). (『白鳥庫吉全集』第4巻 塞外民族史研究 上: 63-320. 東京: 岩波書店. 1970年に再録)

- 孫竹（主編）（1990）『蒙古語族語言詞典』西寧：青海人民出版社。
- 武内康則（2015）『『遼史』中の音写漢字に反映された契丹語の音声と音韻』『内陸アジア言語の研究』30: 1-27.
- 豊田五郎（1985）「契丹小字 ㄨ の新解釈について」『京都産業大学国際言語科学研究会所報』7(1): 47-50.
- 豊田五郎（1991a）「契丹小字《耶律仁先墓誌》読後」未公刊手稿（1991年6月23日付）。
- 豊田五郎（著），那順烏日図（訳）（1991b）「關於契丹小字的幾点探索」『内蒙古社会科学』1991(3): 105-114.
- 豊田五郎（1997）「契丹文字 蒙古の万葉式秘密仮名」『月刊しにか』1997(6): 28-34.
- 豊田五郎（1998）「契丹小字对四季的称呼」『民族語文』1998(1): 78-80.
- 王弘力（1984）「对《契丹小字字源举隅》的幾点商榷」『民族語文』1984(3): 67-69.
- 王弘力（1986）「契丹小字墓誌研究」『民族語文』1986(4): 56-70.
- 王弘力（1987）「丹契小字中之契丹」『民族語文』1987(5): 63-65, 51.
- 呉英喆（2007）『契丹語靜詞語法範疇研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社。
- 呉英喆（2012）「契丹小字新発見資料積読問題」府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Wu Yingzhe & Juha Janhunen (2010) *New materials on the Khitan Small Script: A critical edition of Xiao Dilu and Yeli Xiangwen*. Folkestone: Global Oriental.

執筆者連絡先：

[受領日 2015年3月3日

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

最終原稿受理日 2015年9月9日]

京都大学大学院文学研究科言語学研究室

e-mail: masami.t0k1@gmail.com

## Abstract

### The Orthographic Distinction of Vowel Length in the Khitan Small Script

MASAMI ŌTAKE

*Graduate Student, Kyoto University / JSPS Research Fellow*

The Khitan language is a dead language attested in inscriptions written in the Khitan Small Script from the 11th to the 12th centuries and is genetically related to the Mongolic languages. This paper examines the orthographic distinction of vowel length in the Khitan Small Script. Through comparison of cognates, interpretation of distribution characteristics in the texts and analysis of suffixal allomorphs and spelling alternations, this paper argues that:

- (1) Vowels in open syllable graphemes like Vs and CVs are long (V = vowel, C = consonant including semivowel);
- (2) Vowels in closed syllable graphemes like VC<sub>s</sub> are basically short but a series of graphemes represent a long  $\bar{e}$  plus a consonant.

From a comparative linguistic viewpoint, the following two points are further argued for:

- (3) Some long vowels in Khitan correspond to the secondary long vowels in Modern Mongolian (which resulted from vowel contraction due to the loss of intervocalic consonants);
- (4) Other long vowels may correspond to the primary long vowels which once existed in Proto-Mongolic and Proto-Turkic.